

2018年8月31日

私立大学図書館協会  
国際図書館協力委員会  
委員長 稲垣 智成 様

中央大学図書館  
植苗 翔

## 2018年度私立大学図書館協会海外認定研修（B）報告書

2018年6月23日（土）から30日（土）まで、2018年度海外認定研修（B）に参加しましたので、以下のとおり報告いたします。

### 1. 研修の概要

名称：ALA・米国図書館研修 2018

日程：2018年6月23日（土）～30日（土）

訪問先：New Orleans Museum of Art

American Library Association Annual Conference 2018

Rosa F. Keller Library & Community Center, New Orleans Public Library

New Orleans Public Library

Monroe Library at Loyola University New Orleans

Howard-Tilton Memorial Library, Tulane University Library

Alfred R. Neumann Library, University of Houston-Clear Lake

NASA Space Center Houston

Lone Star College-CyFair Library

Fondren Library, Rice University

Scenic Woods Regional Library, Houston Public Library

### 2. 研修の目的

本研修では、米国図書館協会（ALA）年次総会への参加、大学図書館・公共図書館の見学、および現地図書館員との交流を行う。これらを通じて米国の状況や取り組み、課題を学び、所属館をはじめとする日本の大学図書館の充実と発展に生かすことが目的である。

報告者個人としては、入職以来図書および雑誌の整理部門を主に担当してきたこと、またここ5年ほどは並行して新入生向けの情報リテラシー教育に携わっていることから、冊子体資料共同保存の一形態として北米で展開されているシェアードプリントや、各大学でのリテラシー教育を含めた教員・他部署との連携の現状について、特に強い関心を持って研修に臨んだ。

### 3. 研修報告

多くの図書館を訪れたが、報告者は大学図書館に所属していることもあり、まずは大学図書館に絞って訪問先を紹介していきたい。その上で、報告者の関心のあるテーマについて、今度は横断的に見た上で所感を付すこととする。なお、特に出典を記していない数値は各機関の Web サイトやそれに類する資料からの引用である。

#### <Monroe Library at Loyola University New Orleans>

ロヨラ大学は 1912 年に創立されたカトリック系の私立大学で、人文科学、ビジネス、音楽など 5 つのカレッジに 4,000 名弱が学ぶ。キャンパスはニューオリンズ市街地にほど近い、落ち着いた住宅街にある。

図書館である J. Edgar & Louise S. Monroe Library ではリテラシー教育を中心とした教育支援について説明があったが、これは後述する。先



進的な施設としては、IT 機材の貸出、トレーニング、サポートを行うメディアサービスの担当者から、図書館内のマルチメディアルームの説明を受けた。テクノロジーの進化により、一人の担当者がすべてを知っているというものはもはや無くなったため、スタッフ同士教え合い、あるいは学生からも教えてもらいながら向上していくつもりであるとのこと。

目に付いたのは、会議室から貸出カウンターに至るまで、図書館のありとあらゆる部分に対して「Given by～」と寄付者の表示があったことである。日本では建物単位での寄付はあっても、部屋単位で寄付を募ることはまず無い。担当者は、野心的な計画があるにもかかわらず図書館自体は収入を生み出せる部署ではないことから、図書館の存在価値を常にアピールすると共に、寄付や助成の獲得といったファンドレイジングに努めることが非常に重要である点を強調した。名称からも分かるように図書館の建物自体もファンドレイジングによるものであるし、導入した IT 機器も同様とのことである。

機材導入後のオペレーションやスタッフの教育に要する予算を確保したり、オープンもしくはローコストなリソースを利用して学生に負担なく使ってもらえるようにしたりするなど、苦労と工夫を重ねているようである。



教室番号の上に寄付者が記されている

### <Howard-Tilton Memorial Library, Tulane University Library>

デュレーン大学は1834年にルイジアナ医科大学として設立された私立大学で、南北戦争後の1884年に再編された。公共衛生と熱帯医学、建築学、経営学など6分野で学部・大学院を、医学、法学など3分野で大学院のみを持つ。メインキャンパスはロヨラ大学の近くにあり、約14,000人の学生の多くがこのキャンパスで学ぶ。

ニューオリンズを含むミシシッピ川河口部は、2005年夏のハリケーン「カトリーナ」によって甚大な被害を蒙った。1,800人以上の死者と150万人以上の被災者、推定1,300億ドルの経済被害をもたらした未曾有の災害であるが、図書館としてその例外ではなく、デュレーン大学の主たる図書館であるHoward-Tilton Memorial Libraryは4階建ての建物のうち2階までが水没し、多くの蔵書を失ったという。

そこで同図書館は復旧に合わせて5階と6階を増築し、貴重書を6階に配置、1階にはラーニングcommonsを設置した。2階は閲覧室をリニューアルし、学生にとってはもはや必須となった電源とWi-Fiの利用環境を整備した。この増築により閲覧席は200席増えたが、ワーキングスペースを欲する学生のニーズに応え、紙媒体の資料は積極的に学外の保管庫に別置き、空間をリデザインした結果であるということであった。



1階に設置されたラーニングcommons

同図書館の資料収集に興味深かったのは、収集資

料のデジタル化が灰色文献にまで及んでいることである。例えば4階に独立して入居しているThe Latin American Libraryは、その所蔵する51万点以上の資料の中に、南米で圧政に抵抗する人びとが密かに発行した多くの政治パンフレットを含んでいる。ところが現代においてはその種の資料はWebサイトの形で流布され、そしてすぐに削除されてしまうため、現在は南米の政治系Webサイトのデジタルアーカイビングに取り組んでいるというのである。

同図書館においてはすでに資料費の70%を電子資料が占める状態であり、リサーチライブラリーとして紙媒体資料や一次史料の収集にも努めつつ、デジタルコンテンツへのアクセスへの指導とデジタルスカラシップを重視している。

### <Alfred R. Neumann Library, University of Houston-Clear Lake>

ヒューストンへの移動後最初に訪れたヒューストン大学クリアレイク校(UHCL)は、45,000人以上の学生が学ぶ同大学の中ではごく小規模なキャンパスである。ヒューストン中心部からは30キロほど離れており、ジョンソン宇宙センターのほど近く、森と閑静な住宅地に囲まれて所在する。



NASA の歴史アーカイブが並ぶ

図書館である Alfred R. Neumann Library は約 51 万冊を所蔵しているが、その最大の特徴はジョンソン宇宙センターの歴史資料を保管していることである。1964 年に同センターが設置された際、ヒューストン大学に講義の提供を依頼したのが UHCL の原点であることから元々結びつきも強く、2001 年に同センターの資料の保管に関する覚書を取り交わした。NASA 管轄のままではセキュリティによって資料へのアクセスが難しかったところを、大学の保管とすることで敷居を下げられたことが成果であるという。アポロ計画関連や個人の情報も保管しており、政策に関する資料提供から映画製作の際の時代考証に至るまで様々なサービスを行っているとのことであった。

図書館内は会話の可否によって「Collaborative zone」「Whisper zone」「Silent zone」3 つにゾーニングされており、それぞれ緑、オレンジ、赤のサインが柱に貼られている。日本でも最近導入が多いが、同図書館でも話し声に関するクレームが減ったという。

おもしろかったのは月極で借りられる院生用のキャレルで、レンタル料は 30 ドルであるが順番待ちになる人気だという。ただしそれとは別に数時間借りられるキャレルも用意されていた。この他、マイクロフィルム保管スペースのスタディスペースへの転換やソファへの電源と USB のコンセント設置、スターバックスの無人スタンドの設置といった取り組みは、利用者のニーズに応えるものとして目を引いた。



スターバックスの無人スタンドはとても人気がある

#### < Lone Star College-CyFair Library >

ローンスターカレッジはテキサス州立の二年制大学で、地域住民に安価な高等教育と職業訓練を提供する、いわゆるコミュニティカレッジである。日本の短期大学のイメージとは違い、ヒューストン都市圏北部（埼玉県とほぼ同じ広さのエリア）に 6 キャンパスを持ち、



単位取得のために通う学生に限っても約 9 万人を数える。25 歳以上の学生が約 30%、ヒスパニックやインド系を中心とする非白人学生が約 70%と、幅広い年代や民族的背景を持った人々に門戸が開かれている。米国の多くのコミュニティカレッジがそうであるように、志願者は原則として全員入学することができる。

訪れたサイフェアキャンパスはヒューストンの中心市街地から 40 キロ足らず離れた郊外にあり、約 2 万人の学生が通っている。低層の校舎が余裕を持って配置されているが、広い敷地の半分以上は駐車場であった。



その図書館の最もユニークな点は、地元ハリス郡の公共図書館との複合施設として設置された「Joint library」となっていることである。郡の誘致に大学が応じる形で、双方の資金およびその他の基金を用いて 2003 年に建設された。書架、閲覧スペースとも共用となっており、蔵書も双方の資金によって構築されている。

Joint library のメリットとしては、蔵書の規模を大きく、また多様化させられる上、郡と大学のいずれかの資料費予算が逼迫した時にももう一方が補完できることが挙げられた。また、コミュニティカレッジという性格から地域へのアウトリーチが盛んに行われており、その中心が図書館となっている。サービス・ラーニング（地域社会への貢献活動を組み入れた総合的学習課程）も、その出力の 30%は図書館においてであるという。

一方で、郡と大学の蔵書構築の調整や運営費といった課題についてのコミュニケーションが課題となっているとの説明があった。運営のどのレベルにおいても相互のコミュニケーション、コミットメントが無いとこのような仕組みは瓦解しやすく、同館のような新設型ではなく既存の大学図書館と公共図書館を統合したある館では「離婚」の方向で話が進んでいるとのことであった。

#### < Fondren Library, Rice University >

ライス大学は 1891 年に設立された私立総合大学で、学生数 7,000 人弱の規模ながら 2018 年の世界大学ランキングで 86 位に入る難関であると共に、50 億ドル以上の基金を持つ富裕な大学でもある。ヒューストンの中心部からやや外れた公園や博物館の多い地区に、広壮で美しいキャンパスを持っている。



図書館である Fondren Library では私立ながら地域コミュニティへのサービスも重要と考えているとのこと、一般人も貸出やレファレンスのサービスを受けることができる。

また、図書館の一部門として Digital Media Commons があり、デジタルメディア機材の貸出を行う他、Adobe 社のソフトを使ったメディア編集の可能な PC や 60 インチ幅の印刷が可能な大型カラープリンタが揃っている。機材だけでなくワークショップも催しており、この部署だけでも正職員 3 名とパートタイム職員 12 名が働いている。

もう一つの先端的な部署は、同じく図書館内にある GIS/Data Center である。GIS とは地理情報システム（Geographic Information System）のことで、Google Earth に代表され、道路や店舗、特定地点の住民の収入や年齢などさまざまな空間データをレイヤーに分けて管理し、それを基盤とする地図の上に重ねることができる。ライス大学においては 1990 年代後半に既に導入されており、建築工学や環境政策、ビジネス系など多くの学部で利用されているという。

資金力に裏打ちされたものとも言えるかもしれないが、同大学が情報探索から研究、そ

して成果の発表や保存まであらゆる活動をデジタル基盤で支援するデジタルスカラシップに非常に力を入れていることが見て取れた。

#### <資料の保管スペースとシェアードプリント>

報告者の訪れた大学に限れば、いずれも学習エリア等のニーズの高いスペースを捻出するために、紙媒体資料やマイクロ資料に割くスペースを減らす傾向にある。その方法としては、ヒューストン大学クリアレイク校のように内部文書はすべて電子化したという例もあったものの、デュレーン大学およびライス大学はオフサイトの保管場所への移送を選択していた。我々はライス大学のオフサイトの保管庫を見学することができたので、以下に紹介しておきたい。

同大の保管庫は2004年に建設され、コンクリート作りでハリケーンや増水にも対応可能。保管の環境は華氏 55 度（摂氏 12～13 度）、湿度 30%で、マイクロ資料も同じ環境に置い



ている。出納は作業員が大型のフォークリフトのような機械を操って一人で行い、14 時までのリクエストであれば当日配送が可能である。日本では自動書庫の導入も増えているが、ライス大学ではコストの観点から現状で十分と考えているとのことであった。

収容している資料は、重複資料、利用度の低い資料、オンラインで購読している雑誌の冊子体、貴重書が中心である。この他、地元の美術館のアーカイブも無料で受け入れている。他大学の資料は受け入れていないものの、保管資料はシステム上分けて管理することも可能である。現在の保管庫は 130 万冊収容可能のところ、85-90%の収容率となっている。同規模の倉庫を横に並べてあと

作業員を乗せたリフトのカゴが上がっていく

2 棟建てられる敷地があり、壁を抜いて出納用リフトを共用することができる。

一方、ライス大学は分散型シェアードプリントの取り組みである WEST (Western Regional Storage Trust) にも 2012 年から参加している。WEST はカリフォルニア大学が中心となって 2009 年から計画されたプロジェクトで、現在は州をまたいだ規模になっている。WEST については日本でも事例紹介がなされているが、ライス大学担当者に現在の課題を尋ねたところ、WEST のために付く予算が乏しくパートタイム職員一人しか雇えないこと、また、州をまたぐ規模のプロジェクトとなったことで、州税で購入した資料を他の州の大学に渡してよいのか (WEST では、特定タイトルの保管の責任を負った大学の所蔵に欠号がある場合、該当号の所蔵館に寄贈を依頼できることになっている) という議論が出てきていることの二点が挙げられた。

資料の保管スペースの問題に関しては、彼我の環境や法制度の違いから、米国の先進事

例を即座に日本に応用することが難しい場合もある。しかし、学内で刊行ないしは作成された資料を電子化して紙媒体を減らしていくことは、日本においてももっと検討されてよいと思われる。

#### <リテラシー教育を含めた教員・他部署との連携>

ロヨラ大学では、必須科目である **First Year Seminar** のうち研究課題がある半数の科目と、ライティングの科目の 6 割で、図書館員が情報リテラシーを教える回が設けられている。**First Year Seminar** ではコンテンツの検索・利用・理解のためのインストラクション、ライティングのクラスではウェブサイトやオンライン資料の評価、データベースの検索を論文、プレゼンにどう使うかといった内容で行う。

担当者によると、全ての授業に出張するのは難しいため、大学全体のカリキュラムを確認し、どの科目のどのタイミングで行うのがベストかを考えているとのことであった。

デュレーン大学においても、学びに関する他部署との連携は不可欠であるとの認識から、教員、学生課、学習支援課、オリエンテーション担当部署などとフォーマルにもインフォーマルにも連携しているとのことであった。

興味深いのは図書館の中に他部署が入居している例で、ロヨラ大ではオーナー（成績優秀者）関係、学習支援、障害者支援の各部署が、またデュレーン大学では建築学部とのコラボレーションで社会問題をデザインシンキングで解決することを促す **Taylor Center for Social Innovation and Design** という組織が間借りしていた。日本においても、冊子体を除架した後のスペースを閲覧席やコモンズにするだけでなく、他部署との協働の場にすることも、一考の価値があるのではないだろうか。

#### <所感>

印象的だったのはサービスそのものや機器の充実よりも、米国の図書館員の気風ともいうべき姿勢であった。彼らは社会の流れや大学の、あるいは図書館の進むべき方向といった大きな視点においては高い理想を失わず、また個別教員のニーズといった身近な視点においては泥臭い情報収集に努めて倦まず、図書館のすべきこと、できることを把握した上で、着実に前進しているように思われた。

職場に戻り、米国で学んだことを生かして可能なことから改善を始めている。日常業務に追われる中で視線を遠くに置き続けることの難しさも痛感するが、眼裏の米国の図書館員の姿を励みにして努力していきたい。

#### <最後に>

貴重な学びの機会を与えてくださった国際図書館協力委員会をはじめとする私立大学図書館協会のみなさま、ALA・米国図書館研修事務局（丸善雄松堂株式会社様、図書館総合展運営委員会様）のみなさまに、心より御礼を申し上げます。（了）